

コンクリート工学年次大会 2007（仙台）の概況

実行委員会委員長 大塚 浩 司

仙台大会は、「過去・ひと・未来 千代につながるコンクリート」をキャッチフレーズとして開催された。この言葉には、人の知恵で作られ出されたコンクリートは、過去から現在、さらに未来へと、その時代ごとに生じる様々な問題を人の知恵によって解決しながら永遠につながっていくという意味が込められている。したがって、この大会は、現在のコンクリート構造物に生じている、耐久劣化、寿命、耐震など多くの問題を解決するために行った、材料、検査、診断、補修・補強などに関する研究の成果を発表する大会であったといえる。

仙台大会は、前回と同じ市の中心街にある江陽グランドホテルを会場として開催された。百万都市とはいえ、仙台市内にこれだけの大きな大会を開催できる公共の施設はなく、唯一可能であったのがこのホテルである。このため、参加者の来場や食事等に便利であったばかりでなく、あらゆる面でホテルの「おもてなしの心」をもった専門スタッフの協力が得られ、実行委員会スタッフの不慣れにもかかわらず、参加者からのクレームもなく無事に大会を終えることが出来たと思う。

「開会式」では、実行委員長による開会の挨拶、友澤史紀会長の挨拶に引き続き、大野義照副会長による JCI2006 年度の活動状況報告があった。

「第 29 回コンクリート工学講演会」は、3 日間、9 会場で開催され、過去最大数である 663 編の論文が発表された。

開会式に引き続き展示ホールにおいて「コンクリートテクノプラザ」のオープンセレモニーが遠藤孝夫部会長を中心に行われた。このコンクリートテクノプラザは、「千代につながるコンクリートテクノロジー」というテーマのもと 59 社・団体 68 小間の参加があり、最新技術の展示・紹介が行われた。展示は会場の都合で 2 階と 5 階の 2 フロアー分けて行われたが、参加者は 3 日間の延べ総計で 8,800 人余りといずれの会場も多数の来場者があり盛会であった。出展会社による「技術紹介セッション」も並行して開催され、3 日間総計 1507 人の参加者があった。

「リサーチプラザ」は、2 階会場において、研究専門委員会の研究成果発表会がその展示とともに行われた。初日の午後には、井上範夫部会長の挨拶に引き続き、担当者をかこむパネルディスカッションが行われた。

「生セミナー」は、初日の午後、第 1 会場において「変化する環境の中で - だれが・どこで・なにを - 」をテーマに万木正弘部会長の司会・コーディネーターのもとに、予想を大幅に上回る 607 名の参加者を集めて開催され、基調講演とパネルディスカッションおよび活発な討議が 3 時間 40 分にわたってなされた。

「見学会」は、大会 2 日目に「JR 東日本衣川橋梁改築工事現場と平泉見学」と 3 日目に「東北中央道栗子トンネル建設現場見学」の 2 コースが用意された。両日とも、あいにくの雨のためか参加者は予定より少なかったが充実した見学会であった。

「特別講演会」は、2日目の午後、第1会場において月永洋一部会長の司会で開催された。大会キャッチフレーズになぞらえ「過去」については、前東北歴史博物館館長の工藤雅樹氏を講師に迎え、多賀城に国府が置かれた時代から都市平泉を築いた藤原氏の時代まで歴史上の人物達の活動を系図にもとづいてお話しして頂いた。「未来」については、国立情報学研究所顧問の末松安晴氏を講師に迎え、過去から現在さらに未来へと急速に進展している光通信などの情報革命についてお話しして頂いた。両講演とも大変興味の持てるお話であった。参加者は271名を数えた。

「懇親会」は、特別公演終了後、同じ第1会場を30分間で懇親会場に早変わりをするという離れ業をしてもらい、開催した。「津軽三味線」のアトラクションが行われるなど、和やかな雰囲気の中で進められ、途中で江崎文也次期実行委員長から九州大会の準備状況の報告がなされた。参加者320人を超える盛会であった。

「閉会式」では、実行委員長の謝辞のあと、白井伸明年次論文査読委員会委員長より発表論文の傾向や採択率などについての講評があった。さらに井上範夫部会長から68名の年次論文奨励賞の発表が行われ、実行委員長から受賞者へ賞状と記念品（セラミックスペーパーウェイト）が授与された。

最後に、友澤史紀会長より、江崎文也次期大会実行委員長に委嘱状が手渡された後、江崎次期実行委員長より九州大会への招待がなされた。

本大会は、晴天には恵まれなかったが、連日、講演会場は満員となり、会場ホテル内は人で溢れているような状況であった。その他の行事も順調に行われ、ほぼ所期の目的を果たして終了することが出来た。これもひとえに講演者、座長、コンクリートテクノプラザ出展者、特別講演者、生セミナー参加者をはじめ、大会の行事にご協力いただいた方々のお蔭である。また、年次大会委員会、査読委員会、本部事務局および実行委員会の方々の絶大なご支援によるものであり、関係各位に心から感謝の意を表します。